

# 授業づくりグループ

研究協力者 平成 16～19 年度 武居 渡 (金沢大学教育学部准教授)

## 1. グループの概要

授業づくりグループを立ち上げてから今年で5年目となる。メンバーは高・中・小学部に渡り、入れ替わりもあったが毎年4～7名程度であった。メンバーが研究対象としてきた授業には、高等部では調理を主な活動とした「家庭科」および栽培および木工などの「作業学習」、中学部では「教科学習」と「学部集会」、小学部では「教科学習」などがあった。それぞれの教師が子どもの実態をふまえ、担当する授業の形態や取り組み方を考えながら実践を重ねてきた。

また本グループでは「授業を通して学校生活だけではなく、子どもの生活を助け豊かな生活に結びつけていくためには、どのような取り組みがあるのか」をグループ全体の研究テーマとして同時に検討してきた。

さらに授業のキーワードとして「生活に根ざした授業」「子どもも教師もわかる授業」「子どもとのコミュニケーションを大切にする授業」「子ども同士のかかわりを大切にした授業」「楽しい授業」の5つを設定した。ここでの「生活」とは学校生活にとどまらず、家庭生活や社会生活での「余暇・趣味・将来につながるもの」と広げて捉えている。そこでいくつの実践研究では、子どものニーズ、家庭での実態や保護者の願いなどを知るために、各家庭に通信を出しアンケート調査も行った。それらのアンケートなどを通して、保護者と共通理解を図りながら、授業のねらいを設定した。

このようにグループでは、テーマやキーワードをふまえつつ、豊かな生活をめざすことをグループの主眼においてきた。日々の授業の中での「わかる」を大切にしながら、どうしたら子どもたちの生活を有意義で充実したものにできるのかを研究してきた。

具体的な取り組みとしては、年間を通してメンバーの教師各自が研究対象としている授業を公開し、授業や指導案に対する参観者の指摘や感想をもとに、「人との豊かなかかわり」「授業と生活の関係」「生徒に身につけてほしい力」などについて話し合い、次回以降の授業に反映してきた。さらには、授業の成果を客観的に捉えるために、一人一人の児童生徒の変化についても、評価のあり方とともに大学の先生の協力を得ながら考えてきた。

## 2. これまでの研究について

過去5年間にメンバーの教師が行ってきた実践研究は次のとおりである。

アルファベットは教師名を示し、数字はグループ内での個人の実践研究の順番を表している。

## (1) 平成 15 年度

教師	教科領域等	教師のねがい	手だて	教師が学んだこと
A-1 高等部	作業学習 「栽培・木工 班」 生徒 7 名 教師 2 名	生徒一人一人の特性を活かしながら興味や関心を高め、意欲的な気持ちを育てる	栽培と調理的内容を結び付けた学習活動を展開する	栽培作業と調理・加工学習を関連付けることで生徒の興味や関心が高まり、授業に対して意欲的な気持ちが生じる さらに体験や繰り返しに長期にわたる地道な積み重ねが加わることで「わかる」につながる
高等部 2年生	生活 生徒 9 名 教師 3 名			
B-1 高等部 2年生	生活 生徒 9 名 教師 3 名	生活に楽しみを見つけて、周りの人とうまくかかわりながら、自信をもって社会へ踏み出してほしい	生徒がわかりやすく、活動しやすい「物作り」を授業の柱として、授業を展開	生徒の日常生活へ作った物が浸透していくためには「題材選び」「活動の繰り返し」「作った物をどう使うかの経験」が重要である
C 高等部	数学科 生徒 6 名 教師 1 名	学習過程を生徒と教師が共有しながら展開する、わかる授業づくり	授業だけではなく宿題学習を取り入れられる 実物のお金やプリントなどの教材教具の工夫	生徒一人一人の学習のつまずきに焦点を当て、教材を準備することが、学習面での大きな成果につながった
D-1 中学部	教科学習 生徒 3 名 教師 2 名	生徒が見通しをもって活動し、そこに教師と一緒に活動することで互いのコミュニケーションを深める	生徒が好きで見通しのもちやすい「散歩」を授業の柱として、授業を展開	生徒の「したいこと・伝えたいこと」を見逃さずに拾い上げ、その気持ちを尊重しながらやり取りを進め、活動を展開することが、コミュニケーションを深めるためには大切である
E 中学部	体育科 生徒 18 名 教師 5 名	生徒が自らやってみたい、楽しいと感じながら、のびのびと体を動かす	自転車道路、馬事公苑、角間里山自然学校などの地域の自然、施設を利用	地域の自然や、施設を利用する活動を展開することで、学校では見られない、表情で体を動かす
F 中学部 1年生	生活 生徒 6 名 教師 3 名	お互いの存在を意識し、友だち関係のできるクラス作り	生徒が好きな「自然」を中心とした散歩の活動を展開	生徒一人一人の動きや気持ちを十分に読み取り、理解しながらかかわることが大切である
G 中学部 3年生	生活 生徒 6 名 教師 3 名	授業を生徒同士、教師と生徒が共に関わり合いながら一緒に作り上げる	生徒の共通の楽しみである「のりもの」を利用した散歩の活動を展開	子どもの興味関心のあるものを取り入れ、その時々のお互いの思いを確認し、わかり合いながら授業を展開することが大切である

## (2) 平成 16 年

教師	教科領域等	教師のねがい	手だて	教師が学んだこと
A-2 高等部 1年生	生活 生徒 8 名 教師 3 名	一人一人の子どもたちの可能性を探りながら、広がりをもちた活動へ導き、知識を伴った定した豊かな心を育む	自ら体験する機会を重視し、「食」を種まきや栽培から始まる加工や調理までの「つくる」という一連の流れの中に位置づけて授業を展開する	体験的活動は知識を含め記憶に残りやすくなるとともに、見通しをもちやすい活動につながり、より分かりやすい授業となる

B-2 高等部	選択学習 「調理グループ」  生徒6名 教師1名	自信をもって人と かかわり、主体的に 活動する力をつけ、 社会へ踏み出して ほしい	将来、人にとって欠 かせない食生活、生 徒の興味関心のあ る調理を授業の柱 とした展開	学校だからこそできる「実 験・観察」など五感を通した 授業が、単なる訓練では身が つけない知識・技能につなが った さらにそのことが、人に伝え たい気持ちを生み出し、人と のつながりが生徒の力にな り、生活を豊かにする
D-2 中学部	教科学習  生徒4名 教師2名	生徒が見通しをも って自ら活動し、そ こに教師と一緒に実 際生活に必要なコ ミュニケーション を身につける	生徒が好きで見通 しのもちやすい「散 歩」を授業の柱と して、授業を展開	生徒が好きな活動を取り入 れた授業展開は大切である 好きな活動から広がる活動 や伝えようとする力(言葉 など)がとても大切であり、尊 重しながらかかわることが 重要である 通信を定期的に保護者へ配 布することが、生活につな がる活動のきっかけづくりと もなった
H-1 中学部	学部集会 「ハッピー・ タイム」  生徒18名 教師5名	子どもと教師、子 ども同士の豊かな かわりが期待でき る授業づくり	子どもが自然と集 団となり取り組む 「バルーン」を取 り入れた授業を展開	バルーンを取り入れた活 動を展開することにより、教 師や子どもとかわる姿が増 えた 五感を通して身体を響きあ う体験ができるダンス活 動は、コミュニケーションを成 立することのできる一活動 となる

(3) 平成17年

教師	教科領域等	教師のねがい	手だて	教師が学んだこと
A-3 高等部	作業学習 「栽培・クラ フト班」  生徒7名 教師2名	自分たちが栽培し た野菜と「食」との かかわりをもっと 強く印象づけたい	実際の料理に関連 した野菜を栽培し、 試食の機会を設け ることで、野菜をよ り身近に感じ、栽培 作業や販売活動へ の意識を高める	体験的な学習活動は単なる 知識の獲得としての学習に とどまらず、より印象に残る 活動となる さらに繰り返され、記憶を呼 び起こされる学習は見通し をもちやすい活動として、よ りわかりやすい授業となる そこに安心感を伴った自信 が生まれてくる
B-3 高等部	家庭科  生徒4名 教師1名	学ぶ楽しさを充分 に味わい、自信をも って将来も生き生 きとした生活をお くってほしい	生徒の興味関心 があり、将来も欠か すことのできない「食 生活」を授業の柱と して取り上げ、「健 康」「食生活のアレ ンジ」「知識や調理 技能」を取り入れた 授業を展開	「栽培活動」を取り入れるこ とで、意欲の向上だけではなく、調理技能の向上も図ること ができ、調理時間の短縮も 見られた 「ポートフォリオ」は、自己 有用感、自己肯定感を感じ、 意欲を高める手段となった 「家庭科便り」は保護者と教 師の願いを共有することの きっかけ作りに役立った
I-1 高等部	作業学習 「木工班」  生徒6名 教師2名	意欲的に作業に取 り組み、友だちや教 師と協力して製作さ すことの大切さを 学べる授業づくり	製品製作の際に治 具を用いて、環境を 整備	意欲的に取り組むためには 「できる」「わかる」気持ち が大切であり、治具を用いて 生徒自らの手で製作したこ とを感じられるようにした ことで、制作意欲が高まった

D-2 中学部	教科学習 生徒4名 教師2名	自分のしたいこと、 してほしいことを 何らかの方法で教 師と伝えあい、授 業に見通しをもっ て落ち着いて活 動を共に展開する	生徒が好きなこと である「食べ物」 を取り入れた授 業を展開 ICFの概念を参 考にし「心身機能」 「活動」「参加」 から活動の評価	「好きな活動・生徒が取り 組みやすい活動」を取り 入れたことが、生徒の 「活動」の活性化につ ながる 活性化により「心身機 能」では拒否・要求の 伝達手段が身につ につき、制作活動でも 手元を見て落ち着い て活動する様子が見 られるようになる さらに自分から集 団に入るなど自発 的な行動も増え「参 加」の活性化にもつ ながった
H-1 小学部	教科学習 児童3名 教師2名	人と心の通った豊 かなかかわりがも てる活動づくり	五感を刺激し、身 体を媒介としコ ミュニケーション を高められる、 ダンス活動を取 り入れた授業を 展開	子どもの興味関心 のあったダンス活 動がコミュニケーション の土台となった

(4) 平成18年

教師	教科領域等	教師のねがい	手だて	教師が学んだこと
A-4 高等部	作業学習 「栽培・クラ フト班」 生徒6名 教師2名	作業学習の活動と 「食」とを関連づ けて授業を行う	目標をもち、意識 して活動に臨める ように自己評価票 の「がんばりカード」 を導入する	授業後に「がんばり カード」で結果を 発表する姿に活 動への意欲が向 上した様子が感 じられた
I-1 高等部	選択学習 「書道」 生徒7名 教師2名	生徒らしさを生 かした表現活動 を行う	日本文化の一つ である書道を通 して、教具の工 夫、互いに書 く様子を見合 う環境整備	書道を楽しみ ながら書く様 子が見られる ようになった 教師が生徒 の目の前で 手本を書く ことで、手 本を見て書 くようにな った
D-4 中学部	教科学習 生徒6名 教師2名	友だちとの集 団活動を通 して、生活 に広がり、 生活を拓 げる知識・ 技能を身 につける	「生徒の好きな こと」を尊重 し「友だち 同士のコ ミュニ ケーション」 「生活に つながる 教科学習」 のあり方 を探る	生徒の好きな ことから授 業を始める ことで、自 発的な活 動が増え、 友だち同 士の会 話も活 性化され た 「相手 を意識 する」手 紙活動 や販 売活 動を取 り入れ ること で、人 間関 係や授 業場 面以 外での 活 動内 容にも 広がり が見 られ るよ うに な った
H-2 小学部	教科学習 対象者 児童N男	人と豊かに かわって ほしい	N男の興味 のある バレエ を課外 活 動の 場 面 で 支 援 し、 発 表 会 を 設 定	好きなバレエ の発表練習 を通して、 周囲の友 だち行動 をあわせ 、丁寧な 言葉遣 いを意 識する ようにな り、好 きな活 動を尊 重する ことは 有効 であ った

(5) 平成19年度

今年度の研究対象としている授業は、高等部「作業学習（栽培班）」「選択学習（造形）」を、中学部は「教科学習」「生活」である。今年度の実践研究については p.95～p.123 を見てほしい。

### (6) 授業づくりグループとしての研究の変化

各年度の研究内容を見てみると、平成15年度、平成16年度の実践によって本グループが大切にしている5つのキーワードの有効性について確認できたと言える。また教師自身の興味・関心をつきつめることにより、教師の力量が高まると同時に、専門性も高まっていくことを共通理解した。そのため、平成17年度からは教師の興味・関心のある分野や得意分野を取り上げた実践研究が行われた。

このように研究が深まることにより、「教師の専門性を高めることで、子ども達によい刺激を与え、子どもの生活の豊かさにもつながる」ことを学んだ。しかし、子どもたちにとって意義のある授業となっているのか、取り組みが子どものニーズにあっているのかを常に考える必要性についてもグループ内でよく話し合われた。そこで平成18年度より、活動や子どもの実態にあったいくつかの評価方法を取り入れた実践研究が行われている。

## 3. 研究の成果

### (1) 授業づくりについて

#### ①「わかる」授業づくりについて

本グループではこれまで、初年度にグループのキーワードとして設定した「生活に根ざした授業」「子どもも教師もわかる授業」「子どもとのコミュニケーションを大切にする授業」「子ども同士のかかわりを大切にした授業」「楽しい授業」をふまえつつ、実践研究を行ってきた。

個々の実践研究のまとめから、5つのキーワードを大切にすることは、「わかる」授業づくりには欠かせない、大切な要素であったといえる。

さらに各年度の研究の成果の表を見ると、教師D・F・Gは生徒と「コミュニケーションを大切にした授業展開」を行い、そのことにより活動内容に拡がりが見えてきただけでなく、個の活動からクラスやグループなどの集団活動へ発展していった。教師Aは「食」をテーマに、野菜の栽培を取り上げた実践研究を行った。「種まき・栽培・加工」という「長いスパンで繰り返し取り組める活動」を取り入れることにより、どのような「生きる力」を育むのかを成果としてあげている。教師B、教師Iの実践では、活動のより具体的なねらいをもちながら、「生徒に応じ、吟味された環境・題材や教材選び」を行うことが、生徒の意欲の向上とつながった。

これらのことから「わかる」授業づくりのためには、下記の3点がとても重要であることが実践を通して学ぶことができ、共通理解を図ってきた。

- ・子ども同士、子どもと教師の「コミュニケーション」を大切にした授業展開
- ・長いスパンで繰り返し取り組める活動内容
- ・生徒にあっているかどうか、ねらいにあっているかどうか、吟味された「環境」「題材」「教材」選び

#### ②子どもの生活を助け豊かな生活に結び付けていくために

授業での「題材」「教材」選びを見てみると、下記の4つの観点をふまえた授業を行うと特に有意義であった。

- ・子どもの好きな題材
- ・教師の得意分野や専門性を活かすことのできる題材
- ・体験を通して、五感を刺激することのできる題材

・長いスパンで取り組み、活動の拡がり期待できる題材

教師Dや教師Hの実践から、「子どもの好きな」題材を取り入れることは、子ども同士、子どもと教師がコミュニケーションをとりやすくなると同時に、自発的に課題に取り組む児童生徒の様子が見られ、子どもの意欲の向上につながったといえる。教師B、Hの成果からもわかるように、「教師の得意分野や専門性を活かした」題材に取り組むことは、子どもたちに多くの良い刺激を与えることになった。また、多くの教師が体験的な活動を取り入れており、「体験を通して、五感を刺激する」題材は子どもにとってインパクトがあり、単なる技術の訓練では得られない、学校だからこそ学べる知識・技能につながるのではないかと考えられる。「長いスパンで取り組み、活動の拡がり期待できる」題材を取り入れることで、やはり子どもは見通しがもちやすく、安心感が得られ、そのことが自発的活動につながった。

同時に、これらの要素を盛り込んだ「わかる」授業づくりは、児童生徒の「自信」「自己有用感」「自己達成感」につながり、取り上げた題材や活動に子どもが興味関心をもつきっかけになることも実践研究から学ぶことができた。

このように学校だからこそ取り組める活動から拡がり、子どもが新たに好きになった活動は、きっと学校生活だけではなく社会生活や家庭生活にも拡がり、余暇・趣味・将来につながる活動にもなることが期待できるのではないかと、授業づくりグループでは考えている。

## (2) グループ研究を通して

毎年、小・中・高等部の教師で構成されていることから、グループで研究会を定期的に行うことにより、他学部の児童生徒の様子、授業や活動内容などについて情報交換することができた。

さらに、障害児教育専門や教科専門の大学の先生に協力を得ながら、研究会を進めることにより、個々の実践内容がより深まり、「ICF」の概念などを知るきっかけにもなり、非常に有意義なグループ研究会になったといえる。

このように、グループ研究会を定期的に設けて話し合ってきた「実践研究を通して学んだこと」を、本グループのメンバーでは共通理解を図ることができたが、学校で行われるその他の授業や教育課程などに反映することは難しかった。

本グループの大きな成果は、「目の前の子どもからスタートした、日々の授業の地道な実践により、教師の授業づくり力を高めたこと」と言える。このグループのメンバーが実践を通して学んだことや、共通理解できた授業づくりの上で大切なことを、来年度以降の研究の取り組みの中で、反映できることを期待したい。